日本の住宅におけるガス設備の発達と住生活の変化

江面　嗣人　*Written by Tsuguto Ezura*

はじめに

古い民家を訪れ、ススで真っ黒になった柱や梁に出会ったことがあるだろうか。これらのススは、囲炉裏や台所のかまど等から出たもので、昔は火を使うことは家全体に広く影響を及ぼし、住生活や家の構造にも影響を及ぼしていた。日本の住宅における近代化の一つであるガス設備の発達は、住宅の変化等に大きな影響を及ぼしたと考えられる。以下に、燃料のガス化の歴史と近代の住生活の変化との関係について概説することにしたい。

光源用から熱源用へ

日本におけるガスの使用は、ガス街灯の計画が横浜の外国人居留地で作られたことにより、明治五年（一八七二）、横浜に公共としては国内最初のガス灯が灯されたことに始まる。明治七年（一八七四）には、東京会議所の経営によって東京の新橋から京橋までガス管が通され、銀座通りにガス灯八五基が点灯される。その後、ガス灯は屋内光源として使われ、明治一〇年代には屋内用のガス収入高は、前年比で著しい伸びをみせ、屋内ガス灯の市場を見込んで数系統の支線が次々と作られた。

ガス灯は近代設備として遍く普及するかにみえたが、明治一一年（一八七八）に我が国最初の電灯が点灯され、明治二〇年（一八八七）には東京電灯会社によって電気の公式供給が開始され、明治四〇年（一九〇七）には東京市が、大正二年（一九一三）には日本電灯会社が相次いで電気を供給し、屋内の灯りはガス灯から電灯に移行していった。

しかし、電気の供給が始まってから一気に電灯に移行したわけではなく、明治四〇年代には、裸火のガス灯に被せて使うガスマントルが発明され、ガス灯はそれまでの約五倍の明るさになり、ガス灯は勢いを盛り返すかにみえた。

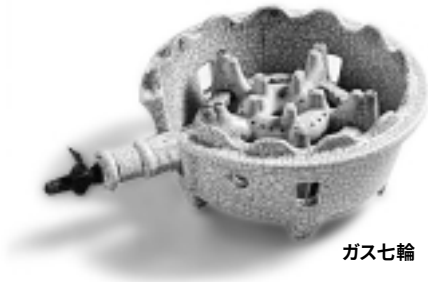
しかし、明治四一年（一九〇八）には、ついに屋内ガス灯を使う戸数は電灯使用戸数に追い抜かれることになった。この差は年々拡大し、特に大正一二年（一九二三）の関東大震災によって決定的な転機を迎えることになった。震災前には、ガスは東京の三分の一近くの家庭で使用されていたが、震災以降、主として火災による危険性が少ないという理由によって、電灯を使う家屋が激増した。

ところが、炭などの燃料よりも消火が簡単で火災の危険の少ないガスは、熱源の燃料として注目されるようになり、大正一三年（一九二四）には灯火用と熱源用の使用戸数の逆転が始まり、使い易さも買われて熱源用の口数は激増し、特に熱源用燃料として不動の地位を築いていった。

ガス器具の普及

明治四三年（一九一〇）に書かれた夏目漱石の小説『門』によれば、三室及び台所をもつ主人公の家では、台所で炭用の七輪を使い、茶の間では火鉢を、灯りには石油ランプを使っており、主人公の大家の家では、台所の板の間にガス七輪（コンロ）を置き、書斎ではガス暖炉、茶の間では長火鉢を使ったと書かれている。昭和になるまでは、こうした階層差による住設備の使用形態には大きな変化がなかったと思われる。

大正一一年に施行された「中等階級住宅調査」によると、当時の職業別ガス設備の普及率が分かる。これによると、先の東京における約三分の一のガス使用者が、中等階級以上の家庭であることが分かる。ガス設備の拡大は、職人や勤め人などの一般の庶民階層までに広く普及していたわけではなく、一般庶民の家庭に普及してくるのは、昭和一〇年代になってからである。では、昭和初期になって、どのようにガスは使われたのだろうか。


ガス七輪

昭和一四年（一九三九）の住宅設備の調査（池田譲次著『小住宅付帯設備管見』同潤会）によると、中流以上の調査家屋五〇戸中五戸がガスの風呂釜を使い、二三戸がガスストーブを使っていたことが分かる。ガスストーブ以外に電気ストーブ等を使っていた家屋が一三戸あるが、ガスストーブの使用が比較的多いのは、経済的であり来客時に短時間で部屋を暖められることがあげられている。ガスが電気のように最低料金を決められておらず、何口設けても電気コンセントのように料金に影響しないことがあげられているのも注目される。ガスストーブの使用がほとんど応接室であることから、いまだ応接室のない一般庶民の家庭ではガスストーブの使用はなかったと考えられる。ガスストーブが広く一般に使われるようになるのは戦後を待たなくてはならない。

ガスの熱源用使用戸数は、大正元年（一九一二）には約三九万戸、大正一二年（一九二三）以降は著しい増加をみせ、昭和三年（一九二八）には一〇〇万戸を越えている。当時のガス器具はガス七輪、炊飯用のガス釜、ガスストーブ、風呂用のガス釜が主として使われていたが、中流以上の家庭でさえもガスの風呂釜やストーブが広く普及していなかったとすると、一般の庶民の住宅に広くガスが普及したのは、簡易に使用できたガス七輪によるものと考えられる。ガスの使用戸数の増加を見ると、ほとんどの数は、このガス七輪の増加によるもので、庶民に最も早く最も多く愛用され、庶民の生活に影響を及ぼしたのはガス七輪であったと考えられる。

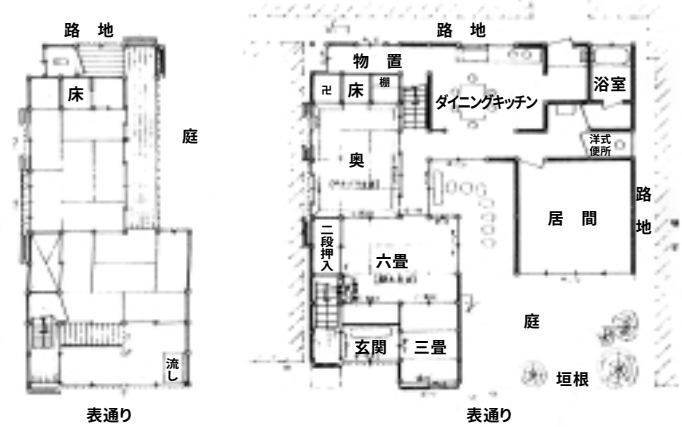
ガス設備の発達と住空間の変化

近代の東京における都市住宅では、煮炊きなどの調理に炭用の七輪が使われた。七輪の場合、台所の外で火を熾し、七輪を家の中に持ち込んで調理に使った。外部で調理することも少なくなく、使われる炭や薪は台所の板の間の下や土間、外部の路地等の軒下に置かれた。近代における庶民住宅の台所は、土間をもち、外部空間と密接な結びつきをもち、調理の作業は台所だけでは完結せず、台所前の外部空間が台所の一部として使われていた。

引窓の見上げ　ガス設備の普及により引窓は姿を消し、台所の上に2階を重ねることもできるようになった

しかし、燃料のガス化により、外で火を熾す必

明治期の平面には表勝手（東京の佃島では「おもてだいどこ」と呼ばれる）形式が見られるが、現在は表に玄関を構え、奥に台所（ダイニングキッチン）を造っている



【同家復元平面図（明治40年前後築）】　【佃島の民家の現状平面図】

要がなくなり、そのための勝手口や外部空間が必要なくなり、炭や薪などの保管場所も必要なくなった。その結果、台所仕事は全て台所の床上でなされるようになり、台所は室内という性格を強め、土間の面積も徐々に減少し、台所は外部との結びつきを必要としなくなった。

東京の下町にあった町家の形式をもつ住宅では、江戸に多く見られた、台所を表側の通りや路地に面して造る「表勝手」の形式が徐々に姿を消した。生活色が強く表れる台所を表側から見えない位置に置き、表には玄関を構えるようになり、住居全体の表側空間への閉鎖性が高まる結果となった。やがて台所は家の最後部に置かれるようになり、裏路地の形式が発達したが、台所が完全に土間を廃止し、現在のように勝手口をもたない形式が現れるのは戦後になってからである。

また、ガス燃料の使用は、炭などの煙の出る燃料から無煙の燃料へ変化したことを意味し、台所の天井に付けられた煙抜きを必要とせず、近代の一般の住宅に広く使われた「引窓」を不要とした。この「引窓」は日本全国に広く見られた形式であるが、町家だけでなく一般の独立住宅の台所にも多く使われた。燃料の無煙化は台所の高い天井も必要としなくなった。この結果、それまで二階が造れなかった台所の上部にも部屋が造れるようになった。台所上部の利用は台所の給排水設備の発達とも関係をしていると考えられるが、燃料のガス化は二階化を可能とする実質的な道を開き、この後、近代の住宅には総二階の形式が現れるようになる。

住生活の近代化とその意味

正面が閉鎖的になったことで、それまでの近所付き合いの仕方も変化した。地域内での普段の付き合いから、それまで気軽に家の中に入って行けた構造は変化し、また、正面の戸が開いていることによって内部から外の様子が見え、町の住人が外部者を容易に確認できるという町の構造も変化した。このような互いに補うことを必要としていた地域生活の構造は徐々に失われ、それぞれの住宅は閉鎖性を高め、独立性を強めていくことになる。調理の燃料として使われたガスは、台所空間を変え、二階化を進め、都市住宅を中心として二階家が増えるなど、住宅や町の構造及び景観までも変化させたと考えられる。

近代におけるガス設備の導入は、確かに住生活を合理化し便利にしたと考えられる。しかしながら、その一方では、住宅の閉鎖性を高め、地域の人々が生活するために必要であった目に見えない地域構造を失う契機になったとも考えられる。外部と繋がりをもたない住宅の構造は、住宅の高層化をもたらす結果ともなった。住生活の近代化という意味でガス設備の発達を考える場合、その発達の陰で変化する生活的な構造にも注意が払われなくてはならない。便利で機能的な生活は魅力あるものであるが、失うものの価値を意識する賢明な近代化でなくてはならないだろう。

CEL

◎江面　嗣人（えづら・つぐと）

文化庁建造物課主任文化財調査官。著書は、『ガス灯からオーブンまで：ガスの文化史』（共著・鹿島出版会）、『近代の住宅建築』（至文堂）など。